ぱられる

楸由宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぱられる

【Ｎコード】

Ｎ６４９０Ｒ

【作者名】

楸由宇

【あらすじ】

２００２年から２００５年ぐらいに書いた短編集第２弾。

瓶

私は、道行く人々がガラス瓶を抱えて歩いているのをよく見かける。ほとんど空のガラス瓶もあれば、透明な液体が入っていたり、砂が詰まっていたり、ゴミが詰まっていることもある。

私の他にそのガラス瓶の存在に気が付いている人はいない。

稀に、輝かんばかりの金色の粉や液体が詰まっている人を見かけることがある。そういう人は大抵、大金持ちだったり、有名人だったりする。

ほんのり紅い液体の入ったガラス瓶を二人で抱えている恋人達を見かけることもある。

一度だけ、空っぽのガラス瓶を抱えている人を見た。彼は、次の日のニュースで飛び降り自殺をしたことが分かった。ある時は、底の抜けたガラス瓶を抱えている少年を見かけたこともあった。彼は、その1週間後、授業中に担任をナイフで刺して捕まった。

人々が抱えているガラス瓶はその人の心を写している。

私のガラス瓶には何が入っているのだろう。

いつまで経っても、自分のガラス瓶の中身を見ることが出来ない。

時計

眠りが浅いせいか、何かの物音で夜中に目が覚めた。
薄明かりの中、枕元の時計を見ると、午前2時丁度。
カーテンの向こう側で、フラッシュの様に光が瞬く。
一瞬遅れて、どろどろという和太鼓の様な音が響く。
耳元で何かが崩れた様な音が響いて、地面が揺れた。
ああ、この音で目が覚めたのかと何とはなく思った。
薄明かりの中、枕元の時計を見ると、午前4時丁度。
再び雷光がフラッシュの様に瞬き、窓枠を壁に映す。
どろどろとお腹に響く雷鳴を轟かせ、地面が揺れる。
ああ、近くに雷が落ちたのかなと何とはなく思った。
明るい光の中、枕元の時計を見ると、午前6時丁度。
緩やかに街が息づき、また今日も長い一日が始まる。
夜中の雷が嘘のように、窓の向こうに青空が広がる。
窓から溢れる朝日の中、時計は午前7時丁度だった。

引き出し

ある暇な昼下がり、ベッドの上でぼんやりしていた僕は、部屋の隅で自分そっくりの小人を見つけた。丁度僕の親指くらいの大きさだ。そっと摘んで観察してみた。服装も髪型もなにより顔も自分とそっくりだった。違うのはサイズだけ。

小さな自分の声は小さすぎて聞き取れなかったが、こちらの言うことはわかるらしい。危害を加えないとわかったのか、小さな自分は大人しく机の上に座っていた。

僕は、小さな自分のために机の引き出しを改造してミニチュアの部屋を造った。小さな自分は引き出しの部屋を気に入ってくれたらしい。喜んで部屋の中を動き回っている。

すると突然僕の部屋が動いた。

上を見上げると、天井に開いた隙間から大きな自分の顔が覗いていた。

バス停

３畳ほどの薄暗く狭いバス待合所。とっくに田舎の１時間に１本のバスは行ってしまい、する事もなくただなかば朽ちかけたベンチに座ってぽっかりと切り取られた入口から覗く沈みゆく朱い夕日を眺めていた。

ふと気が付くと、くたびれたスーツを着た冴えない中年男が座っている。

仕事に疲れた精気のない顔をして、ぼーっと座っている。中年男はこちらが見ていることに気が付くと、顔を逸らした。

何となく不愉快になる。こんな大人にはなりたくない。

男の向こう側には、お爺さんが座っていた。

お爺さんはこちらが見ていることに気が付くと、何本か抜けた前歯を見せてニッと笑った。

何となく不愉快になる。こんな爺さんにはなりたくない。

反対側には、また中年男が座っている。

仕事帰りなのか疲れてはいるが充実した顔で、腕には大事そうに鞄を抱え家族の下へ運んでくれるバスが来るのを待っている。

男は、こちらが見ていることに気が付くと、はにかんだ笑いを見せた。

何となく懐かしくなる。自分にもこんな時代があったことを思い出す。

男の向こう側には、若い男が座っている。

これから社会へ出ていくのだろう、まだまだやる気に溢れた顔で、バスを待っている。

何となく懐かしくなる。自分にもやる気に溢れた時代があったことを思い出す。

夕日が地平線の向こうの寝床へ帰った頃、バスがやってきて、中年男と青年を乗せて走りだした。

すっかり夜の帷が落ちた道に出てバスがすっかり見えなくなると、老人は自分と同じくらいくたびれた妻の待つ家へと歩き出した。

ネオン

この交差点に、あの軒下に、そのバス停に彼らは静かに佇む。
一寸した弾みに、彼らは僕らの世界に重なる。
それは、夢の中、気が弛んだ一瞬、自分が自分では無くなる瞬間。

車の中にも、部屋の中にも、道端にも。
彼らはいつでもこちらの世界へ姿を現すときを待っている。
それは、夢の中、事故にあった一瞬、本当の自分を見失った瞬間。

夢の中で、彼らにあったことは無いだろうか？
彼らは静かに自己主張を繰り返す。
彼らは街中で煌めくネオンサインの様に派手な自己主張はしない。
ただ、ひたすら待っている。

隣に座っているサラリーマンが、タクシーの運転手が彼らかもしれない。
古典を教えてくれた先生が、注射してくれた看護士が彼らかもしれない。
ネオンサインの様に派手な主張はしていない。

そっと足を踏み入れた瞬間、僕らは虜になる。
あの静かなる自己主張の世界に。

部屋

私は、関係を持った男の未来が見える。
その行為がクライマックスに達すると、目の前にスクリーンが現れて、相手の男の未来がそこに映るのだ。ある男はどこかの不細工な女と3人のガキどもに囲まれて幸せそうな馬鹿面を晒していたし、別の男は早朝のどこかの林の中でロープにぶら下がっていた。顔が好みだった男は、車に撥ねられるし、金を持っていた男は、若い男の子と裸で抱き合ってやがった。
いつもいつもろくでもない男ばかりで、ほとほと自分の男運の無さに呆れていた。
今の男は、裸で私の首を絞めていた。
その男は、行為の最中に私のあそこを覗き込み、部屋が見えると言った。その部屋で、裸の自分が裸の女の首を絞めていると。
その女はあたしだよと言った3日後、自分の男運の無さを笑うしかなかった。
結局、私はその男に首を絞められて死んでしまった。

輪ゴム

ある時、私は輪ゴムの内側に、別の世界を見つけてしまった。輪ゴムの輪の内側を覗くと、小さい頃に御伽話で聞いたことがある人や動物や妖怪が、謡ったり踊ったり語り合ったりしていた。

輪ゴムだから伸ばせば、輪は大きくなり向こう側が見やすくなる。そうして、私は時々輪の向こう側をそっと覗いていた。こちら側の世界で輪ゴムの位置を変えると内側に見えるものも変わることをある時気付いた私は、輪ゴムを広げて腕を輪の向こう側に伸ばしてみた。手に触れた草花を抜いてみる。輪のこちら側に持ってきた花は見たこともないものだったが、それは確かに存在していた。

これなら向こう側の世界に行けるかもしれない。

そう思った私は、輪ゴムの中に右腕を思いっきり通してみた。しかし、肩のところで輪ゴムは伸びきって切れてしまった。

それ以来、私の右腕に誰かが触れるのを感じることが出来るが、私は自分の右腕を見たことはない。

もう二度と、輪ゴムの内側にあの御伽の国は見えなかったから。

ゴミ箱

家の前にあったポリバケツのゴミ箱を開けると、そこには男が入っていた。
残飯を入れようと思っていたのに、既に一杯だったから、今日は諦めよう。
男に挨拶をしてのゴミ箱の蓋を閉めて、この残飯をどうしようかと考えた。
仕方がないので、家の中のシンクの三角コーナーに置いておくことにした。
翌朝ポリバケツのゴミ箱を開けると、中には昨日とは別の男が入っていた。
また残飯をゴミ箱に移すことが出来なかったので仕方なくシンクに置いた。
その次の日も今までとは別の男が、ポリバケツのゴミ箱の中に入っていた。
さすがにもうシンクには置けなかったので、庭に穴を掘って残飯を埋めた。
次の朝、旦那を仕事に送り出そうとすると、あのゴミ箱の前で立ち止まる。
旦那が下を向いたまま言った。「今日は俺がこのゴミ箱に入る当番なんだ。」
私は旦那がゴミ箱に入るのを見届けてから、残飯を入れる穴を掘り始めた。

平行

気が付くと僕は、舟の上にいた。
父さんと母さんに囲まれて。
ある時、父さんが僕に小さな舟をくれた。
僕はその舟に乗り込んだ。
周りには、平行に走るいくつもの河。
幾つかは合流し、幾つかは分かれていく。

僕は、小さな支流に乗った。
幾つもの小さな支流は合流し、仲間はすぐに増えた。
僕らの先頭には先生がいる。
でも、仲間達と別れの時は必ず来る。
時が来ると、僕らは先生を追い越してそれぞれの支流へ進む。

大きな舟に乗り換えた奴、すぐに同乗者を見つけた奴。
舟が沈んでしまった奴もいるし、滝に飲み込まれてしまった奴もいる。

それでも、僕は幾つもの河を越えて行く。
最愛の同乗者を見つけるために。
そして、小さな舟を造るために。

先の見えないこの河を越えて行く。

非常時

トイレに行きたくなって、目が覚めた。
トイレのドアを開けると、便器に人が座っていたので、ごめんなさいと言って慌ててドアを閉めた。
ドアを閉めて一瞬後、俺はもう1年以上一人暮らしをしている事に気が付いた。
ノックをしてみたが、返事はない。
恐る恐るドアを開けると、誰もいなかった。
寝ぼけていたことにして、さっさと用を足した。
水を流して、ドアを開けるとそこは自分の部屋じゃ無かった。
隣の部屋に来たらしい。
壁の向こうから、声が聞こえてきた。
「あれ、ここ何処だ？」

人参パーク

最近よく同じ夢を見る。
人参の夢だ。
それも、人参の公園の夢だ。
そこは、どう見ても公園なのに、何故かそこかしこから人参が生えているのだ。
どうにも不思議な夢だ。
そして、必ずその公園である人物と会う。
その人物は、それぞれの夢で全く違う外見をしているのだが、同一人物と分かる。
何故なら、その人物は公園に生えている人参を引っこ抜いてボリボリと貪り食っているのだ。
そして、必ず3口ごとに「ショッパイ、ショッパイ」と呟くのだ。
最前、同じ夢と言ったが、必ずしも同一の夢では無いことを付記しておこう。
何時しか自分の中では、その公園は「人参パーク」で、その人物は、「しょっぱい太郎」と名付けられていた。

ある朝、いつもの様に人参パークとしょっぱい太郎の夢を見た後、目が覚めた。
時計を見るとまだ朝の5時半だった。
しかし、妙に目が覚めてしまい、再び寝付くことが出来なくなってしまった。
平時は7時に起きるので、まだ1時間半も眠ることができるのに、もったいないなと思った。
しかし30分頑張っても眠れなかったので、仕方なくベッドから這い出した。
Tシャツとスウェットを身に付けると、何となく散歩に出たくな

り、朝もや煙る街へと繰出した。

その後のことはよく覚えていない。
見慣れたはずの街を歩いていたはずなのに、気が付くと見覚えの無い道を歩いていた。
いや、正確に言うと、全く見覚えがない訳では無かった。
何となく嫌な予感がした。
その道の先には公園が在った。
早朝にも関わらず、公園には人がいた。
恐る恐る周りを見回すと、果たしてそこは人参だらけだった。
ヒョロ長い先客は、何も言わず人参を引っこ抜いている。
その先客はおもむろに振り向くと、人参を差し出した。

気が付くと、ベッドの上にいた。
時計を見ると、7時24分だった。
慌ててしまった。
　あれも夢だったのだろうか？
でも、右手にはしっかりと人参が握られている。
齧るととてもしょっぱかった。

餌

久しぶりに金魚を買った。
特筆すべきところが無いただの金魚だ。
全部で3匹いる。
餌をやった。
すごい勢いで食べている。
お腹が空いているのだろう。
ぱらぱらと金魚の餌を水槽に撒く。
ぱらぱらぱらぱらぱらぱらぱらぱらぱらぱらぱらぱら。
餌をどんどん食べる。
ぱくぱく食べる。
ぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱく。
ぱらぱらぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱく。
気が付けば一昼夜餌を撒き続け、餌を食べ続けている。
ぱらぱらぱくぱくぱくぱくぱらぱらぱくぱく。
既に金魚と一緒に買ってきた餌は無くなった。
食卓の上にあった食パンを千切って与える。
むしゃむしゃ食べている。
食パンもすぐに無くなり、冷蔵庫から魚肉ソーセージを出してきて与える。
むしゃむしゃ食べている。
ソーセージもすぐに無くなる。
既に3匹の金魚は、水槽一杯の大きさだ。
風呂に水を張り、そちらへ移す。
冷蔵庫から、チーズ、らっきょう、ハム、トマト、人参、合挽きの挽肉、鶏のささみ、冷凍コーンを出してきて与える。
がつがつ食べている。
冷蔵庫から残り全てを持ってきた。

がつがつ食べている。
すぐに無くなった。
家の中から食べるものが全て無くなった。
仕方なく買い物に出かける。
近所のスーパーの肉を全て買い占めた。
戻ると風呂の中には一匹しかいなかった。
あまりのひもじさに共食いをしたらしい。
生き残った金魚は既に風呂を一杯にする大きさだ。
巨大な金魚は、気持ち悪い。
大きな口は、恐ろしい。
買ってきた肉もすぐに無くなった。
泣く泣く飼い猫のチャッピーを与える。
頭からがつがつ食べた。
食べさせるものがもう無い。
仕方なく自分の頭を金魚に与えた。
ばくっ！

コレクショニア

コレクター同好会と言う集まりが有る。
私もその同士の一人だ。
これは、皆が同じ物を集めている訳では無い。
そんじゃそこらの集まりでは無い。
同好会のメンバーは個人個人それぞれ違う物を集めている。
皆それぞれのこだわりを持って、なかなか面白い物を集めている。
元書店を経営していたKさんは、書店のレジによく置いているようなキャンペーン用の栞を集めている。３０年以上の筋金入りだ。
集めた栞は１０００種は下らないだろう。
大学生のY君は、ある種類のガムの包み紙を集めている。３センチ×５センチくらいの銀色に光るシートだ。一枚一枚奇麗に延ばして、今は２４５０枚集めたらしい。
教師歴１３年のGさんは、生徒の髪の毛を集めている。一歩間違えれば、犯罪に走りかねないが、採取した髪の毛を一本一本コピー用紙に張り、生徒の名前と採取した日付、その他に色々とその生徒に関することを書いている。流石に、他のコレクター仲間からも気味悪がられているが、なかなかどうして素晴しいコレクションでは無いですか。彼は、４００名程集まっているらしい。
我が同好会の紅一点、薬局勤めのTさんは、なんとコンドームを集めている。コンドームと一口でいっても、かなりの種類がある。集め始めてはや五年。今は一部屋まるまるコンドームのパッケージだらけになってしまったらしい。数はもう本人にも分からないと言っている。
異色な溜め込まないコレクターもいる。溜め込むと余りに膨大な量になってしまうからだ。そのFさんは、ある地方新聞を第１版から最終版まで集めている。全国紙では無いので、比較的集めやすいらしいのだが、ほんの少しの距離や時間差でかなり細かく版が違っ

ているらしい。どうやって集めているのか分からないが、独自のルートが有るらしい。仕事が終わった後、全てに目を通すのが楽しみらしい。

活動的なコレクターとしては、整理券マニアのRさんがいる。イベントやセールのときに配られるあの整理券だ。しかも彼は必ず1番を取りにいく。少し大きなイベントなどでは1泊2泊は当たり前だ。つい最近、狙っていたイベントの整理券を取り損ねたと言って嘆いていた。1日と8時間前に並びにいったら、既に先客が居たらしい。そのときのRさんは本当に悔しそうだった。

比較的正統派のコレクターとしては、マッチのコレクターがいる。ある大手証券会社の会長をしているAさんだ。しかし、彼が集めているのは主にブック型のマッチだ。集めて50年近く経ったらしい。今は、段ボール箱40箱以上有るらしい。そのためだけのアパートを借りている程だ。

髪の毛を集めているGさんより気味悪がられているIさんがいる。彼は、毛虫好きで日本にいる毛虫の殆どの標本を持っている。私も見せてもらったことが有るが、あまり気持ちが良い物では無かった。

他にも、トランプマニア、サイコロマニア、空き箱マニア、フリーソフトマニア、フォントマニア、帽子マニア、目覚まし時計マニア、文庫カバーマニア、ラブホテル限定ライターマニア、ダイレクトメールマニア、映画の新聞広告マニア、コカコーラの瓶マニア、街頭で配っているティッシュマニア、診察券マニアなど色々なコレクターやマニアがいる。

彼等の話を聞いていると、普段何気なく見過ごしてしまう事に気付かせてもらえて興味深い時間を過ごす事ができる。

え？　私のコレクションは何かって？

私のコレクションは、コレクターだよ。コレクターのコレクター。今まで紹介してきたコレクター達が私のコレクションだ。

私は自分の事をコレクショニアと自称しているけどね。他の誰にも負けないコレクションだと自負しているよ。

今は総勢９９名。あと１人で１００人なんだが、君は何かを集めているかね？

翼

……

……

背中に翼が生えた。
親友のリカちゃんは、羽が生えた。
私は、真っ白い鳩の翼。
リカちゃんは、奇麗なチョウチョの羽。
向こうから、ジロー君達が来た。
ジロー君のは、蜻蛉の羽。
ケンジ君は、鷲の翼だった。
シンヤ君は、ペンギンの翼？だった。
皆で、シンヤ君を笑った。
後ろで声がした。
「ペンギンならまだマシだよ」
ミノル君の背中には、タンポポの綿毛が生えていた。

……

……

昔日

嗚呼、何てつまらないのだらう。
私は足許の石礫を蹴飛ばした。
からからと坂下へ転がつて行く石礫を眺め乍ら亦呟く。
嗚呼、何てつまらないのだらう。

私は足許を眺めて唯独りで対話を続ける。
死とは如何なるものか。
生とは如何なるものか。
死と生の挾間に存在するものとは一体如何なるものか。

私は細く長い月を見上げて未だ独りで対話を続ける。
死して猶蒼き希望とは如何なるものか。
絶望の淵より覗く紅き欲望とは如何なるものか。
在って猶猛き絶望とは如何なるものか。

私は恐い。
死して在らぬと云う事が。
私は恐い。
在らぬ者に成り得ると云う事が。
死して猶蒼き希望と絶望の淵より覗く紅き欲望。

此処に己が居ると云う事は、
此処に居ぬと云う事を内包し、
此処に己が居ぬと云う事は、
此処に居ると云う事を内包するのであらう。
其れは在ると云う事の意味を我等に享受させむ。

嗚呼、如何なる時も、
私は生ける屍。

ねえねえ

「ねえねえ、知らない？」
「何を？」
「知らないなら、いいや」
「何だよぉ？」
「じゃあね～」
「何だよぉ！」

「ねえねえ、知らない？」
「いきなり何だよ。知らないってさ」
「だから、知らない？」
「いきなり言われたって、知らねぇよ」
「知らないなら、いいや。じゃあね～」

「ねえねえ、知らない？」
「え？　何ですか？」
「ねえねえ、知ってるの？」
「いやぁ、分かりませんねぇ」
「そっか、ありがと。じゃあね～」

「あ。お～い、みっきちゃ～ん！」
「お、さっちん。どした？」
「ねえねえ、知らない？」
「おお、さっきは桜の木の下に居たぞ」
「ほんと？　サンキュ」
「お～い、さっち～ん。こけるなよ～」
「は～い」

「いたいた。ほら、ねえねえ、帰るわよ」
「にゃお～ん」

電話

電話をしても、絶対に出ない友人が居る。
かと言って、家に居ないわけでもない。
しかも、携帯電話も持っている。
勿論、携帯電話に掛けたところで、出るわけはない。
しかし、携帯電話を肌身離さずに持っている。
一度、携帯電話を忘れて来たときは、落ち着かないと言って、早引けをしてさっさと帰ってしまった。
そして、彼は自ら電話を掛けるということもしない。
電話以外にも、メールなどで携帯電話を使用している気配もない。
どうしても、気になって仕方がないので、一度彼に尋ねたことがある。
「どうして、電話を持っているのに使わないのか」と。
彼は答えた。
「だって、電話やメールは信用出来ないじゃない」
さらに、私は尋ねた。
「それなら、何故電話を持っているのか」と。
今度は、こう答えた。
「だって、電話を持っていない人って信用出来ないじゃない」

酸っぱい

【今年も酸っぱいが解禁】

味覚庁酸味局の発表を受けて十日の午前零時、日本全国で一斉に酸っぱいが解禁になった。今年の酸っぱいは、ややできが良く、昨年に比べ後味がハッキリしている。酸味研究家の澤田秀樹さんの話によれば、この春から初夏にかけての晴天が酸味の熟成に良い影響を与えたようだ。

この解禁に先立って全国各地の百貨店では各種の催しも開かれた。市内の東郷百貨店では、九日の午後十時から特別催事場を開放して集まったお客さん達と酸っぱいの解禁をカウントダウンした。カウントダウンとともにデジタル時計が十日の午前十二時を表示すると、会場内で歓声が起きて集まった人々は皆各々の酸っぱいを頬張った。開場とともに一番のりでこの催しにやってきた市内の会社員太宰静香さんは梅干しを頬張り「今年も待っていましたよ。やっぱり酸っぱいが無ければ夏は始まりませんね」と語った。

この酸っぱいも約三か月後の１０月末で再び禁止されてしまう。今年は解禁が例年より多少遅れたため、この酸っぱいを楽しめる期間は短くなってしまったが、今年は再度禁止になるまでの間、質の良い酸っぱいを楽しめるだろう。

信号

先日、妙な場所を発見した。
いつ行っても、青にならない信号機がある交差点だ。
初めてそこを通りかかったのは、１ヶ月前の真夜中だった。大学からの帰り道、なんとなくいつもと違う道を通ってみたくなったのだ。
でも、そこで１５分も待っていたのに、青にならないから諦めてＵターンした。
次の日も、通ったけど、やっぱり青にはならなかった。
何となく気になって、それから毎日通ったけど、やっぱり青にはならなかった。
地元の人たちは、あの信号は絶対青にならないことを知っているのか、その交差点で他の車を見かけたことはない。
１週間通ってみたけれど、青になったことはなかった。
最後の信号待ちをしている間に思った。
多分この信号は、全てが急ぎ足で通り過ぎていく現在の社会に反抗しているのだ、と。
あれから、その交差点には行ってないが、多分、今、この瞬間もあの信号機は、僕らの社会にたった独りで反抗しているのだろう。

霧

その日は、晴れていました。
いつものように大学からでると、それは満天の星空でした。綺麗な三日月も出ていました。その月は、まるでチェシャ猫のように笑っているみたいでした。月の笑い声につられて星々も笑っているみたいでした。
僕は、いつものように駅へ行くために農場へ足を踏み入れました。純白の雪原に遠くに見える街の明かりがとても綺麗でした。周りに明かりもなく僕は独り雪原の中へと歩き出しました。
細い細いまるで獣道のようなただ踏み固めた道を独り歩いて行きました。闇に目が慣れてきた僕はふと立ち止まり周りを見回したのです。頭の上は満天の星空そして綺麗な三日月。僕の周りは闇に彩られた広い広い雪原。左手に見える影のようなポプラ並木が印象的でした。右手には遠くに明かりのついた建物。その時僕は遠くの雪が盛りあがったように見えました。その盛りあがりはだんだんと近づいてきます。それは霧でした。澄み渡っている空気の中を白い白い霧のかたまりは意志を持っているかのようにこちらへ近づいて来ます。徐々に周りの空気が冷たくなってきたような気がします。そしてだんだんと霧が僕の身体を包んでいきました。風も少し出て来たようでした。
辺りが真っ白になった時僕は声を聞きました。それは若い女の人の声でした。
「あなたは、一体何にそんなに怯えているの？」
自分に話しかけられたような気がした私は、一瞬びくりと身体を振るわせました。
「私は何も怯えてなんていないわ。」
声の主は二人いるみたいです。
彼女らの話は聞こえてくるのですが姿はいっこうに見えません。

右から聞こえてくるような気がしますし、左のような気がします。時々は棒の後ろや上からも聞こえてくるような気もするのです。話は、まだ続くようです。
「だって、何かから逃げるように生き急いでいるように見えるのよ」
「そんなことはないわ。お姉さんの錯覚よ。私には、お姉さんこそ何かから逃げているように見えるわ」
「あなたには、まだわからないでしょうね。私が、いえ、私たちが一体どんな世界に住んでいるのか」
声の主達は姉妹のようです。僕は耳を澄ませて声の主が何処にいるのか知ろうとしましたが、声が聞こえてくる方向はいっこうに定まりません。
「私たちが何をしなければいけないか、何処へ行こうとしているのか。まだ若いあなたには分からないでしょう」
「ええ、分からないわ。それに、分かりたくもないわ。私、姉さんみたいになりたくないもの」
その声は何処から聞こえてくるのか、全く分かりませんでしたが、しかし、確実にその声は近付いてきます。妹らしき声が続けました。
「ねえ、姉さんは何をそんなに怯えているの？」
その後、しばらく無音が続きました。
そして、その声は突然僕の耳元でこう囁いたのです。
「それは、多分、あなたと同じものよ」
その瞬間、僕の周りの温度が急に下がったような気がしました。
「同じもの？」
妹らしき声は、離れたところから聞こえました。
「そう、あなたと同じもの。私は、忘れ去られてしまうのが、とっても恐い」
その声も、もう離れてしまいました。そして、周りの温度も戻っていました。
「私は、そんなこと恐くはないわ」
「そんなことを言えるのは、あなたがまだ若い証拠よ。あなただっ

て…」
不思議な声は、先程と同じように何処から聞こえてくるのか分からなくなってしまいました。
そして、気が付けば霧も晴れていて、僕は星空の下、ぽつんと獣道のような狭い道に佇んでいたのです。
僕は、再び駅を目指して歩き始めました。
周りは霧などなかったように静まり返っています。
僕は、駅に向かいながら思いました。
僕も、誰かに気にかけていて欲しかったことに。
一人は、淋しいということに。
だから、僕は決めました。
あの声のことは、一生忘れないと。
そうすれば、僕が死んでしまうまでは、あのお姉さんの声は忘れ去られることはなくなります。
そうして、僕は家族の待つ家へと帰っていきました。
僕も、誰かに死ぬまで思い続けてもらいたいなあと思いながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6490r/

ぱられる

2011年3月24日13時10分発行